

大新—教取陣争の更なる発展へ向けて——

△明文教育研究会△

大新陣争報告、寄望等に陣争勝利総決起集
会に結集されたすべての学友諸君の教育研究
会より、この間の我々の大新陣争に対する陣
わり方を述べつつ、大新陣争と我々の現在展
開せんとしている教取陣争との関連性を明ら
かにし、学友諸君に陣争への決起を呼びかけ
ていきたいと思います。

大新陣争は、一身在余にわたり、理事会当
面の新陣争会に對する連の交々キに抗し陣争
れてきたのだけれども、その交々キが明らか
にハレン手なものであり、MUP共陣と理事
会との討論においてもそれが明らかになり
いたにもかかわらず、MUP共陣自体の物理
的力量の弱さのみを理事者連は逃さという形
で協賛の収束を企ててきた。その過程の中
で我々教育研究会は、大新陣争連絡会議に結集
していったのであります。

最初の段階において我々の大新陣争に對
する陣争は、基本的に「助、人陣争」の感
を感ずったのだけれども、しかしながら大
新陣争に陣争り、授業介入等よりMUP中
この大新陣争にかけられた弾圧がまたまた
けられたものではなく、明治大学、学生をよ
り強く有効的に管理していく、それけつり
は、学生とこれと我々の諸個人との関係性
求の過程において判断していくということに
つざるのだけれども、過去における大新陣
争、ある側面として全共陣Mという自らの生
活過程に日漸性にアンチするものとしての新
在々々向関係の創出という陣争の展開があつ
たように、再びあのようないの災がもたら
ざることを危惧している当否か、陣争のメ
ン、大新の独占を企てることによつてその
と争うんとするたのめの大新陣争に對する弾
圧があるかということが明らかになってい
る。この陣争で我々教育研究会とい
う陣争の存在自体に對する疑問、つまり
陣争に對する陣争のつらさ、陣争に對する
陣争の存在、とこの陣争のつらさを大衆化し
て我々の力とすべきものとして各種陣
争の存在を強固している、というものであ

る。この陣争は、我々の諸個人との関係性
求の過程において判断していくということに
つざるのだけれども、過去における大新陣
争、ある側面として全共陣Mという自らの生
活過程に日漸性にアンチするものとしての新
在々々向関係の創出という陣争の展開があつ
たように、再びあのようないの災がもたら
ざることを危惧している当否か、陣争のメ
ン、大新の独占を企てることによつてその
と争うんとするたのめの大新陣争に對する弾
圧があるかということが明らかになってい
る。この陣争で我々教育研究会とい
う陣争の存在自体に對する疑問、つまり
陣争に對する陣争のつらさ、陣争に對する
陣争の存在、とこの陣争のつらさを大衆化し
て我々の力とすべきものとして各種陣
争の存在を強固している、というものであ

る。この陣争は、我々の諸個人との関係性
求の過程において判断していくということに
つざるのだけれども、過去における大新陣
争、ある側面として全共陣Mという自らの生
活過程に日漸性にアンチするものとしての新
在々々向関係の創出という陣争の展開があつ
たように、再びあのようないの災がもたら
ざることを危惧している当否か、陣争のメ
ン、大新の独占を企てることによつてその
と争うんとするたのめの大新陣争に對する弾
圧があるかということが明らかになってい
る。この陣争で我々教育研究会とい
う陣争の存在自体に對する疑問、つまり
陣争に對する陣争のつらさ、陣争に對する
陣争の存在、とこの陣争のつらさを大衆化し
て我々の力とすべきものとして各種陣
争の存在を強固している、というものであ

る。この陣争は、我々の諸個人との関係性
求の過程において判断していくということに
つざるのだけれども、過去における大新陣
争、ある側面として全共陣Mという自らの生
活過程に日漸性にアンチするものとしての新
在々々向関係の創出という陣争の展開があつ
たように、再びあのようないの災がもたら
ざることを危惧している当否か、陣争のメ
ン、大新の独占を企てることによつてその
と争うんとするたのめの大新陣争に對する弾
圧があるかということが明らかになってい
る。この陣争で我々教育研究会とい
う陣争の存在自体に對する疑問、つまり
陣争に對する陣争のつらさ、陣争に對する
陣争の存在、とこの陣争のつらさを大衆化し
て我々の力とすべきものとして各種陣
争の存在を強固している、というものであ

系としてこの同一性として作意とし、そして各
履修者に対して手紙を送り、出席表を回収し
たうとしてきているのだけれど、このかゝる形
で現在具体的相手がない感じとして交換
相手は行われている。

主として我々が二の陣の中であつて居る
ものは、現実から遊離して概念的考察を粉
砕する中で、教師と我々のものとしをいくと
いうことであり、それはつまり要求の教授
― 学生という一対進行の関係を考へることであ
り、我々学生相互間の関係を追求― 変革して
いくということである。それはすべからず公
教育関係の矛盾性として位置づけられる
であらう。

二のような交換相手は大新闘争を提起して
きて居る「メデイアの革命から革命のメデイ
アへ」実行手、書き手の変更」という二の
具体的内容、つまり媒介としてあるだろうと
考へるのである。二の問題はいまは明確ではな
いので今二の内容性を明確にしていくとい
うことを確認したいと思ひます。

しかしながら二の交換相手は今秋における
値上げ阻止に対する闘いへの強い軸とな
りうることも考へるわけです。つまり交換相手
とは、それは公教育体系内への矛盾性をも
つわけであり、その内容形成としてあるわけ
であり、それは学値上げ阻止の闘いには「原
七が知らぬ」というで上がるからなくない
等の六法論的論議に終始しなからぬもの、さ
らに、「向題は、二のような教育自体がおか
しいことである」というより深化された争
争への発展の方向を指示し示す闘いとして交換
相手その内容性をもっているのではないかと
考へるわけです。そしてその内容性の具体的
提示は今後の交換相手の発展のいかにな
つていゝか云へるのである。

この二つを協会の交換相手は結果的に
交換相手と闘いながらつて居るのか。
以上をもつて、教育研究会のアッポールに
かえらせていただきたく思ひます。

MEMO

大新闘争は解任闘争勝利
交換相手勝利
交換相手勝利
交換相手勝利
交換相手勝利